

各関係機関長 殿

香川県農業試験場病害虫防除所長
(公印省略)

平成 23 年度 病害虫発生調査速報第 5 号について

このことについて、次のとおり発表したので送付します。

平成 23 年度 病害虫発生調査速報 第 5 号

1. 病害虫名：レタス斑点細菌病、モザイク病（えそ輪紋症状を含む）、菌核病及び灰色かび病
2. 対象作物：レタス
3. 内 容：平成 23 年 12 月 20、21 日に、1～2 月どりレタスを対象に巡回調査を実施したところ、1～2 月どりレタスでの発生量は、斑点細菌病およびモザイク病（えそ輪紋症状を含む）がやや多く、菌核病が平年並、灰色かび病がやや少なかった。1 月の気象は、気温が平年並か低く、降水量が平年並の予報であり、発生助長的ではないが、圃場の排水不良や換気不足によりトンネル内部の高温多湿状態が続くと、斑点細菌病、菌核病及び灰色かび病の発生が増加するので注意が必要である。また、モザイク病の罹病株は、今後定植がおこなわれる春どりレタスの伝染源となるおそれがあるので注意が必要である。
4. 調査結果の概要：斑点細菌病では、発生圃場率は平年並であったが、一部多発圃場があり、発病株率は高く、発生量がやや多い状況を認めた。また、モザイク病（えそ輪紋症状を含む）では、発病株率は平年に比べて低いものの、発生圃場率は高く、広範囲に発生を認めた。菌核病では、発生圃場率及び発病株率ともに平年並であり、発生量が平年並の状況であった。灰色かび病では、発生圃場率及び発病株率ともに平年に比べてやや低く、発生量がやや少ない状況であった（第 1～4 表）。

第1表 1～2月どり栽培での年次別の
レタス斑点細菌病の発生状況

調査年	発生圃場率(%)	発病株率(%)
2001	12.5	1.0
2002	4.0	1.0
2003	33.3	6.0
2004	5.6	2.0
2005	0	-
2006	0	-
2007	0	-
2008	31.3	13.4
2009	17.4	1.5
2010	0	-
2011	8.3	55.0
平年	10.4	4.2

第2表 1～2月どり栽培での年次別の
レタスモザイク病の発生状況

調査年	発生圃場率(%)	発病株率(%)
2001	8.3	1.0
2002	20.0	1.5
2003	8.4	3.0
2004	0	-
2005	0	-
2006	0	-
2007	0	-
2008	12.5	1.8
2009	8.7	1.1
2010	29.2	2.7
2011	20.8	0.8
平年	8.7	1.9

第3表 1～2月どり栽培での年次別の
レタス菌核病の発生状況

調査年	発生圃場率(%)	発病株率(%)
2001	20.8	1.4
2002	56.0	1.6
2003	16.7	7.0
2004	27.8	0.5
2005	5.6	0.1
2006	4.2	0.1
2007	40.0	1.6
2008	56.3	2.5
2009	39.1	5.0
2010	50.0	1.2
2011	29.2	1.0
平年	31.7	2.1

第4表 1～2月どり栽培での年次別の
レタス灰色かび病の発生状況

調査年	発生圃場率(%)	発病株率(%)
2001	8.3	1.0
2002	8.0	1.0
2003	0	-
2004	11.1	0.5
2005	55.6	2.6
2006	58.3	2.6
2007	28.0	0.8
2008	25.0	0.7
2009	30.4	3.5
2010	4.2	1.0
2011	8.3	1.0
平年	22.9	1.5

5. 防除実施上の留意点

1) 斑点細菌病

- (1) 育苗は風当りの少ないところで行い、できるだけ傷をつけない。
- (2) 下葉から上位葉に病斑が認められる場合は、結球葉にまで被害が及ぶ可能性があるので早めに収穫を行う。
- (3) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。換気に際しては風下側の片側換気を行う。
- (4) トンネル被覆が遅れた場合には、被覆後に発病が急増するので、トンネル内をよく観察し、発生が見られる場合には早めに防除する。

2) モザイク病（えそ輪紋症状を含む）

- (1) えそ輪紋症状は、低温期に増加・多発する傾向があり、結球内部まで褐色のえそ輪紋を生じさせることがあるので、出荷時の選別を徹底する。
- (2) 今後定植がおこなわれる春どりレタスの伝染源となるおそれがあるので、発病株は見つけ次第抜き取って適正に処分する。
- (3) 苗床は防虫ネットで被覆し、アブラムシ類の飛び込みを防止するとともに、圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (4) 定植までには、アブラムシ類に登録のある薬剤をセルトレイ処理する。
- (5) 薬剤防除を行う場合にはアブラムシ類の抵抗性発達を回避するため、同一系統薬剤の連用は避ける。

3) 菌核病及び灰色かび病

- (1) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。
- (2) 発生を認めた場合は、菌核が形成される前に発病株を圃場外に持ち出して適正に処分する。
- (3) 多発すると防除が困難となるので初期防除を徹底する。また、降雨が続く場合には適宜防除を実施する。
- (4) 基幹防除時期は定植7～10日後と25～35日後である。トンネル被覆後は薬剤がかかりにくくなるので、散布むらに注意して薬剤を散布する。
- (5) 灰色かび病の耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。